

団塊世代の力と『2007年問題』

茨城大学 長谷川 幸 介

「第2の自然」と社会化・文化化

人間という動物はおかしな動物である。地球上に誕生した多くの生物は地球環境に制約されながら適応し生存し続けてきた。多くの場合は、地球環境に適応できなかつたり、地球環境の変化に対応できずに種を存続できなかったのである。しかし、人間という種は環境に適応することよりも自分に合わせて地球環境を変化させてきた種である。エリマキトカゲが砂漠の気候に合わせて襟巻きを成長させ、川獺が手足を櫂のように変化させて適応してきたのに対し、人間は砂漠を変え、川を変えようとする動物だということである。

これには理由があるかもしれない。人間という種が適者生存原則からいえば自然環境の中では非常に弱い動物だということである。妊娠期間の長さや一人歩きの能力の獲得までに有する時間を考えると、弱肉強食の自然界で生き抜くなんてどう考えても不可能に思えてならない。すなわち、自然環境の中では弱肉強食の頂上には決して立てないだけでなく、種の存続さえ危うい劣等種であるということである。

ところが、人間は自らの特性が最も効果的に機能し、他の種に君臨できるように地球環境を変えることに生存戦略をおいたのである。つまり、自分にとって都合がいいように自然状態を変化させ、「第2の自然」を創り上げたのである。「人間にとってもっとも好都合な自然=『第2の自然』」こそ社会といわれる人工装置である。この社会という装置は、「一人では生存できない人間の弱点」を補うため人間相互の関わりを多様に張り巡らすことによって成立している。しかし、この関わりは歴史的にも空間的にも異なっており、多様な文化を形成することになっている。

この社会は、時間（歴史）的にも空間的にも異なった内容を形成するが、この社会に加わることによって人間は強者になりえたのだと考えられる。「一人前になる」とは、この社会の構成員として承認されるということの意味している。この過程を社会化と呼んだり、文化化と表現したりする。現代日本社会においては、この社会化・文化化の多くの部分が学校という装置によって行われているというわけである。

社会指標としての年齢と団塊世代

しかし、社会化・文化化する対象である『第2の自然』=社会は、前述したとおり、時間・空間的に異なっている。同じ日本でも、江戸時代や戦前の社会と現代社会は異なった「一人前」指標を有しているし、日本社会とアメリカ社会でも異なった指標を有していると考えられるのである。もちろん多くの指標項目は共通しているのだが指標の基準が異なっているということである。

その指標の中心的なものに、年齢と性別があると考えられる。「何歳から大人になるのか、また何歳から年寄りと称されるのか」という年齢区分と「男らしさ、女らしさ=ジェンダー」と称される性別区分である。この社会的ラベルがどのような時期にいかなる理由で張られるのか、そしてまた、このラベルを剥がすことが可能なのか、これが今回の特集「団塊世代の力と『2007年問題』」のテーマである。

1947～49年に誕生したベビーブーマー達を「団塊の世代」と表現した堺屋太一（76年『団塊の世代』）は、約30年後の05年『高齢化大好機』の中でこの世代の社会的影響を次のように整理している。

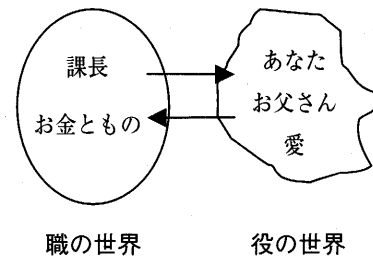
- ①「団塊お荷物論」は誤りである。
- ②団塊世代は巨大市場を作り出してきた。
- ③団塊世代に関する国（官僚）の予測はことごとく外れた。
- ④「年齢観」革命が起きている。
- ⑤団塊労働力が勝ち組を決める。
- ⑥増加する真可処分所得。
- ⑦お金は自分のために使いなさい。

この団塊世代約1085万人が2007年を境目にして大挙定年退職を迎えることになる。この大量な退職者が生み出す影響を「2007年問題」と表現しているが、否定的影響として理解するか、肯定的影響として理解するかという認識の問題と並んで、この過程が21世紀の日本社会の大きな転換を告げる契機にはなりそうである。

「2つの世界」と団塊世代

団塊世代の大量退職が社会問題化される理由は、現代日本社会の特長に影響されていると考えられる。

現代日本社会（とりわけ団塊世代が生き抜いてきた）は右の模式図の示したように「2つの世界」から構成されているといえる。つまり、会社を中心とした「職の世界」と家庭・地域社会を中心とした「役の世界」の二つである。戦後の高度経済成長を支えた団塊世代は、この二つの世界を本格的に往復した最初の世代だった。



すし詰め小学校・「新制」中学校を経験し、集団就職の真っ只中で高学歴化の波を受け続けた世代であった。それは、同時に「お金とも」中心の「職の世界」が肥大化し、家庭や地域社会中心の「役の世界」との乖離が本格化した時代でもあった。そして、企業戦士から会社人間へと変化した端境期に位置するのが団塊世代である。マイホーム、マイカー時代の到来を作り上げた世代であり、この世代が通過した後、日本社会は少なからず変化を経験することになったのである。

この会社人間たちが生み出した「第2の自然」のルールは60歳定年というルールである。「職の世界」中心に生き抜いてきた世代にとって定年退職は「社会的死」の宣告に近いかもしれない。「2つの世界」の往来が閉ざされることになる。名刺は不要だ。「職の世界」では不要な人間との烙印が押されることになる。「役の世界」への戦士の帰還をどのように作り上げていくかが大きな問題となる。次のような課題が現実になってくるといわれている。

「職の世界」を支え続けた団塊世代の技術やノウハウを一時に失う場合日本の多くの企業は多大な影響を受けることになる（野村総研の調査によれば、「業務に支障」と回答した20～40代の若手社員は6割に達する）。また、退職に伴う大量の財（退職金・年金など）が流動する場合、団塊世代は公共サービスの受け手（消費者）だけになってしまうの

かという問題である（着るものや旅行、保険など団塊世代をターゲットにした商売は虎視眈々と待っている）。朝日ネットは、次のような詩的（？）な表現で「2007年問題」の行く末を提示している。

退職金と年金で豊かな生活、旅とエッセイの優雅な第二の人生
連れ合いに熟年離婚を迫られる濡れ落ち葉、早すぎる老・老介護、無目的手持ち無
沙汰なブラブラ毎日
職場で、補助員・嘱託として勤務続行
地方議員で生まれ変わり、自ら創る新ビジネスによる生涯現役
NPO 法人を経営して地域参画
趣味への耽溺
病院通い
.....？

60 歳定年呪縛と男女の「2007 年問題」

死には「生物的死」と「社会的死」の二つがあるといわれている。呼吸が止まり、心臓が停止し、瞳孔が開きなどの身体的な死に対し、家族や友人など親しい人々が本人の死を確認・納得する過程を社会的な死という表現するわけである。通夜や告別式はこの社会的死を承認する儀式でもあるといえる。一般的には、「生物的死」が「社会的死」に先行するのであるが、現代日本社会における定年は「職の世界」における社会的死の確認であるかのように感じられる。であるならば、60 歳が社会的死の境界（三途の川）ということになるかもしれない。しかし、なぜ 60 歳なのだろう。65 歳でも 70 歳でも 75 歳でも構わないのではないだろうか。団塊世代は戦後社会において数多くの変化を生み出してきた（生み出さざるを得なかった）人々である。60 歳定年 = 60 歳「社会的死」の方程式を転換できるだろうか。

時間には 2 つの時間がある。カチカチと万人に共通に流れる物差しとしての時間とサラサラと流れる不平等な時間である。サラサラ時間は砂時計のようなものであり、仲間とともに作り出す不平等な時間である。一緒に砂時計をひっくり返したときに始めて流れる時間にほかならない。60 歳という区切りがカチカチ時間として流れるなら、それ以降はやる人にしか訪れない砂時計の時間だということである。ちなみに、サラサラ時間の目盛りは量ではなく深さなのであろう。

60 歳の呪縛の中に漂泊するのは多くの場合男性である。それは、「職の世界」の中心が男性であり続けたという戦後社会の特質とそれによって醸成されたジェンダー意識によるのであろう。女性が主たる役割を形成した「役の世界」では 60 歳は男性を感じるほどには大きな意味を有してはいない。「役の世界」に流れる時間はそれぞれに異なった速度と振幅を持ちながら形成されるのであり、60 歳の意味はそれぞれに異なっている場合が多いからである。

カチカチ時間から解き放たれた団塊世代の男性がこのサラサラ時間の音を聴くことができるか、それは優れて人生の豊かさの問題といえるかもしれない。「熟年離婚」というテレビドラマが流行しているが、この二つ時間の微妙なずれを夫と妻の立場から表現しているのかもしれない。

団塊世代の男たちは、女性が生きてきた時間の流れを学ぶことができるだろうか。そして、絶対化してきた60歳という境界を相対化できるだろうか。現代という時間と日本という空間が強固に作り上げてきた境界を乗り越え進むことができるだろうか。常に大きな課題に直面しながら生きてきた世代だから信じられるように思えるのである。